

# 保岡勝也の住宅作品の一考察

～現存する三作品「平野邸（旧麻田駒乃助邸）・旧山崎別邸・吉田邸」の座敷の寸法比較を中心に～

内田研究室 安齋 貴大

## 研究概要：

保岡勝也は、我が国最初の「住宅作家」の一人として都市中流層向けの独立住宅を手掛け、晩年は興味を伝統的な数寄屋建築へと向けた建築家として知られる。この保岡の住宅観や作風については明らかにされてきたものの、保岡の手掛けた数寄屋建築に関する分析はほとんど行われていない。

## 研究目的：

本研究では、現存する三作品「平野邸（旧麻田駒乃助邸）・旧山崎別邸・吉田邸（旧釜浅肥料店主屋）」をもとに、保岡の手掛けた数寄屋建築の特徴について明らかにすることを目的とする。



平野邸



旧山崎別邸



吉田邸

## 研究成果：

所在地・東京都文京区 所在地・埼玉県川越市 所在地・群馬県高崎市

### ～保岡の著作から見る数寄屋建築の考え～

保岡の残した著作には、数寄屋建築に関するものとして『最新住宅建築』（大正12年）と『数寄屋建築』（昭和5年）がある。この二つの著作から保岡の数寄屋建築は、自然材料をそのまま使用することと床の間と床脇の釣合いのように室内の釣合いに注意して設計することを数寄屋の特徴と述べていることが分かる。しかし、具体的な設計寸法などに関しては一切触れられておらず、設計手法といった特徴に関しては不明である。

### ～三作品の座敷の寸法比較～

数寄屋建築の特徴として保岡の手掛けた住宅の伝統性の継承を明らかにするため、ここでは座敷の設計寸法に着目した。一般に伝統建築では、木割と称される各部の比例と大きさを決定する原理が存在していたことが知られる。そこで、保岡の座敷の部分の寸法から木割の影響の有無を明らかにした。その際、木割として室町時代末の『匠明殿屋集』のものと同様の『現代住宅設計百図』のものを用いた。

三作品の座敷各部の寸法と木割を比較すると・・・

	室町時代末の木割	戦前期の木割	平野邸			旧山崎別邸			吉田邸		
			室町時代末	戦前期	実測寸法	室町時代末	戦前期	実測寸法	室町時代末	戦前期	実測寸法
柱幅	A	A	108	108	108	126	126	126	120	120	120
柱面	B		9		9	18			15		15
柱面内	C		90		90	90			90		90
一間	D		1860		1860	1818		1818	1860		1860
長押（厚さ）	C	A×0.8（またはA×0.9）	○90	86	93	○90	101	90	90	○96	100
簷し掛け（高さ）	C	A×0.55（またはA×0.6）	90	○59	54	90	○69	62	90	○66	60
簷し掛け（幅）	C	A×0.8	90	86	90	90	○101	105	○90		96
鴨居（厚さ）	2.5B	A×0.35（またはA×0.4）	23	○38	45	45	44	44	38		42
連棚（板の厚さ）	1.5B	A×0.2（またはA×0.25）	14	○22	24	27	25		23	○24	25
海老束（幅）	2.5B	連棚（板の厚さ）×1.5	23	○33	30	45	38		38	○36	30
海老束（高さ）	C	A×0.8	90	86	87	90	101		90	96	170
床（高さ）	2A	≒A（またはA×0.9）	216	○97	95	252	113	100	240	○108	110
書院（出幅）	D/4	369mm（または510mm）	465	510	450	○465	510	455	465	369	400

平野邸と吉田邸で、9箇所中5箇所ですべて戦前期の木割に近い部分が見られた。このことから保岡は戦前期の木割の原理をもとに設計していたことが分かる。

### ～結論～

保岡の数寄屋建築は、基本的には戦前期に一般に使用されたであろう木割をもとに定めた独自の木割、さらに著作より環境、室内の釣合、材料についても考えて設計していたことが考えられる。この結果、木割を参考にして設計していたことから、伝統性を継承し設計していたことが明らかになった。

### 苦労した点や感想など：

本研究を終えて、現存する三作品の座敷各部の寸法と比較をする木割で、座敷の細かい部分まで記載されている木割を探すこと

がとても苦労しました。また、木割と比較をするための座敷寸法において、実測調査で細かい部分まで実測を行ったことがとても大変でした。最後に、一年間の研究を通して、研究というものの難しさを感じたと同時に、多くの知識を習得し、自分の為になる充実した研究でした。